

137. 京都・西陣における

居住者の抱く『都市認識』を通じた自地域への価値付けを扱う『ダイアログ』手法の開発

-都市・建築デザインのための『都市認識』アプローチ法の初期的研究

Dialogue for Approaching to Inhabitant's Evaluating Sphere in own Surroundings in Nishijin, Kyoto

- A Study on Approaching to a wholeness Inhabitant's Interpretation on City for Urban and Architectural Design

太田 裕通*・神吉紀世子**

Hiroto Ota*, Kiyoko Kanki**

In order to understand and design the sense of whole in urban space, it is actually important to approach to a wholeness of inhabitant's interpretation on the city as the temporal and spatial existence. In this paper, as the first stage of the approach, we set up originally the method of Dialogue among informant, facilitator, and approacher. We practiced and confirmed that Dialogue that is approaching to inhabitant's Evaluating Sphere in own surroundings in Nishijin, Kyoto. In the dialogue, approachers encouraged to bring out of Evaluating Sphere by utilizing various maps and drawing many sketches. Then we described Evaluating Sphere and the situation of sharing it in the dialogue.

Keywords: Interpretation on City, Dialogue, Evaluating Sphere, Approacher, Sketch, Nishijin

都市認識, ダイアログ, 価値付け, アプローチ, スケッチ, 西陣

1. 序

1-1. 将来へ向けた個人の抱く多様な価値付けの共有

個人が自らを取り巻く都市・地域の環境^{注1)} に対してどこに関心があり、何を大事であると捉えているのかを扱うことは都市・建築デザインに向けた一つのアプローチとして重要である。本研究ではそうした捉え方を価値付けと呼び、自身の経験を基に都市・地域に対する問いや切り口の立て方を通して価値を見出していくようなコミュニケーションに着目する。しかし、本人にとっても価値付けは普段から整理されておらず、説明し易いものではないだろう。

そこで本研究では、『ダイアログ (dialogue)』^{注2)} という方法を用いて個人的な説明し難い価値付けを2人以上で了解し合えるように働き掛ける方法を考える。その結果として都市・地域に日常的にアーカイブしていくアプローチ (図1-②) が重要ではないかと思われる。すなわち、既に多数派の人によって了解され常識として考えられている価値付けを都市・地域の価値であるとして扱ってしまう (価値化) ような既存のやり方 (図1-①) を越えて、図1-③のように状況に応じてそういった多様な価値付けのアーカイブから都市・地域で再発見し価値化を働き掛けるようなや

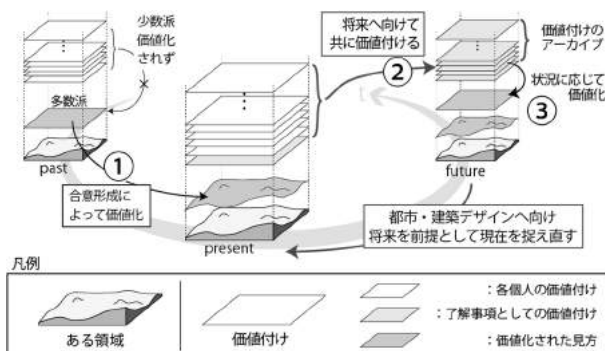


図1. 多様な価値付けの日常的なアーカイブを図るアプローチ

り方が可能な状況を構想するための、アクションメソッドを実践的に提案することが本研究の大枠の目標である。

1-2. 『都市認識』へのアプローチと『ダイアログ』

以上から本研究は理論的には現象学的な立場を採り^{注3)}、『ダイアログ』という語り合い、考える場において、そこで思い描いた内容を基に互いの了解事項を積み重ねて価値付けを行い、それを情報として扱い得るような手法を考案する。そこで図2のように、ある都市・地域に関して、居住者自身の関心に基づく捉え方で語る際に思い描く全体を『都市認識』と呼び^{注4)}、当初漠然としている複雑な意味内容の捉え方を話題にしつつ、対話の中で相互に説明し合えるようになった都市・地域を共に価値付ける『ダイアログ』の手法を実施可能段階まで開発する (以下、本研究における共有とはこの意味で用いる)。ここで『都市認識』は実際に『ダイアログ』を行う中で徐々に輪郭化されるものであるが、初期段階には都市・建築デザインのために少なくとも図3のような要素に注目することとした。都市の中での自らが位置すると思う地理的なまとまり (自地

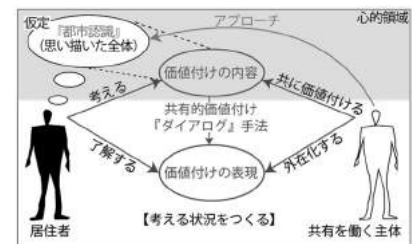


図2. 『都市認識』を通じた共有価値付け

ねて価値付けを行い、それを情報として扱い得るような手法を考案する。そこで図2のように、ある都市・地域に関して、居住者自身の関心に基づく捉え方で語る際に思い描く全体を『都市認識』と呼び^{注4)}、当初漠然としている複雑な意味内容の捉え方を話題にしつつ、対話の中で相互に説明し合えるようになった都市・地域を共に価値付ける『ダイアログ』の手法を実施可能段階まで開発する (以下、本研究における共有とはこの意味で用いる)。ここで『都市認識』は実際に『ダイアログ』を行う中で徐々に輪郭化されるものであるが、初期段階には都市・建築デザインのために少なくとも図3のような要素に注目することとした。都市の中での自らが位置すると思う地理的なまとまり (自地

初期定義 (仮定義)	
居住者が都市との関わり (自身の経験等) を通じて捉える世界の全体	
初期的論点 (①～④は相互に影響を与える)	
【都市の現状について】	【都市の将来について】
①居住者が関わる都市の地理的なまとまり (自地域)	④向かうべき姿
②①のまとまりを成り立たせると思われる質や仕組み	
③自地域における現象に関する評価	

図3. 『都市認識』の初期定義と初期的論点

*学生会員 京都大学大学院工学研究科建築学専攻 (Kyoto University)

**正会員 京都大学大学院工学研究科建築学専攻 (Kyoto University)

域)を『ダイアログ』における語りのきっかけとし、身の回りの現象と、空間的にも時間的にも大きなまとまり(『都市認識』)をダイナミックに結び付け、価値付けるように働き掛け、触発する状況をつくりだすことを試みる。

1-3. 研究の目的

以上より本稿の目的は、居住者毎の『都市認識』を扱う具体的な手法として『ダイアログ』手法を実施可能な段階まで開発することとする。その際、手法として対話によって了解し合いながら自地域を共に価値付けることが出来ていることが達成目標となり、了解事項を積み重ねる為の内容の外在化、情報としてアーカイブする為の記述化等の少なくとも目標を満たすような設定の構造化を試みるものとする。また、地域の将来へ向けた議論に繋げることが出来る可能性を示すこととする。尚、本手法は居住者が何を考えているのかを調査するというよりもむしろ何をどのように考えるのかを共につくり上げていくためのアクションメソッドであり、実施において大きな負担とならないようなことも重視している。

2. 研究の方法

2-1. 対象都市・地域

手法の開発は京都・西陣(図4)の居住者を対象として『ダイアログ』の実施と考察によって行った。西陣は織物で有名な都市内産業地域であり既に価値化されている見方の強さから、かえって地域に潜む多様な価値が引き出し難しく、また都市空間の物理的な側面においても実は西陣らしさを見出すことは容易ではないことから、多様な個人の価値付けに改めて目を向けることが有効な地域である。その都市空間の将来へ向け、困難さは①産業の衰退と専用住宅の増加から産業地域としての特色が無くなりつつある、②物理的環境のImageabilityが低い、③上京区と重なる程広域の一体的地域と説明されるにも関わらず西陣の印象の中心が見えにくい、④個別のまちづくり活動は盛んであるが全体像に繋がるシナリオが見えにくい等である。こうした地域において居住者の『都市認識』へとアプローチするアクションを実装していくことに有意義であると考えた。



図4. 上京区から北区へまたがる西陣の領域
(google map (<https://maps.google.co.jp/>) より作成)

2-2. 手法の漸次的開発

手法の開発は、提案する『都市認識』概念と『ダイアログ』手法の初期設定を基に、実際に西陣で『ダイアログ』

を実施しながらその結果をフィードバックし、概念と手法を漸次的に構造化する方法を採った。ここで開発過程は3つのphaseに分けて行い、それぞれphase1~3に対応してプレ『ダイアログ』、テスト『ダイアログ』、『ダイアログ』のオペレーションを設け、その都度構造化するテーマと実施方法の設定を行った。全過程は図5のようになる。Phase1はプレとして西陣において6回を実施し、その都度最適と思われる手法を試行し、漸次的に構造化を図った。Phase2では建築系学生(B2~M1)ら9人に協力を依頼し、手法のロールプレイテストを行い、Phase1において構造化した手法をさらに更新し、プロトタイプを開発した。Phase3はプロトタイプを用いた手法のオペレーションであり、西陣において7人の居住者を対象に『ダイアログ』を実施した。そして実際に得られた価値付けに関する記述化も行い、すべての居住者に関してフィードバックを得てプロトタイプの実効果を確認した。



図5. 『ダイアログ』手法の漸次的構造化過程

2-3. 研究の進め方と本稿の章構成の対応

以上から次章からの構成は研究の進め方と対応して図6のようになる。

3. 『ダイアログ』の手法開発過程

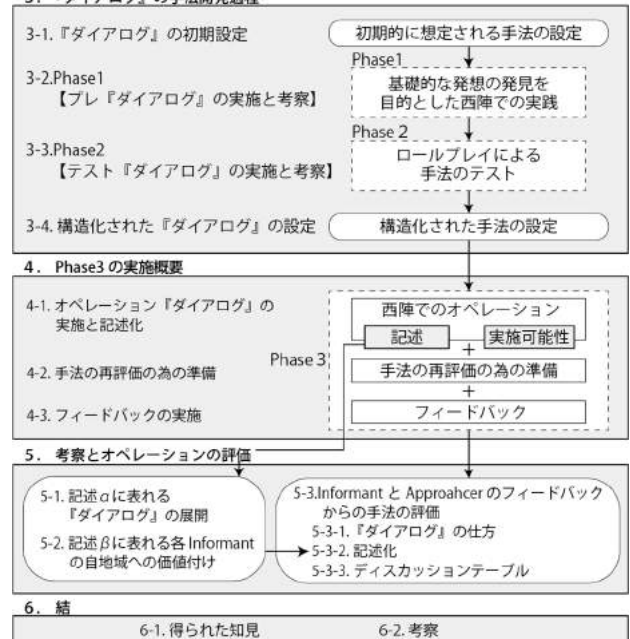


図6. 研究の進め方と本稿の章構成の関係

3. 『ダイアログ』の手法開発過程

3-1. 『ダイアログ』の初期設定

『ダイアログ』は単なる会話のことではなく物理学者D・ボームの定義する³⁾「意識それ自体の理解を目的としたも

の」である。研究の目的を満たすような手法の開発のためには少なくとも図7のような4つの課題が想定され、それぞれに対して初期的な手法の設定を行った。この初期設定を起点として漸次的に構造化していく。

初期設定
【話の仕方】
①: 都市の現状と将来に関する話題を提供する
②: 聞き方の心構えは、1. 自分がすでに知っていることを元に聞く、2. 自分を驚かすところから聞く、3. 相手に共感しながら聞く、4. 最も深いソースから聞く、である
【外在の仕方】
③: 共有した意味内容を外在化し、確認し合う方法→1/500のスケールのまち模型を作成し、それを囲んで『ダイアログ』を実施し意味内容を透明版に描き模型へ突き刺す
【記述の仕方】
④: 『ダイアログ』中に採録されるあらゆる記録を基に『ダイアログ』全体の状況と参加者間で意味内容の共有化が起こった状況を再構成（記述化）し文書的に再現する（尚、個人史ヒアリングの「作品化」を行う際の方法意識に従う）。
【設定の仕方】
⑤: 対象となる居住者は1人ずつとし、研究の被験者ではなく日常的な会話の延長のような状況をつくる
⑥: 実施の場所は居住者が指定した某所で行い、こちらが出向くという形を採る
⑦: 参加者は合計3人以上として1対1のようなインタビュー形式ではない、身構えず自由に語り合える場とする

図7. 『ダイアログ』手法の初期設定

3-2. Phase1【プレ『ダイアログ』の実施と考察】



写真1. プレ『ダイアログ』の様子

本Phaseでは西陣地域の居住者を対象に『ダイアログ』の初期設定から6回実施し、その都度手法の改善をしつつ、手法的に構造化し易い【外在の仕方】と【記述の仕方】の構造化を試みた。対象者は西陣織関係者や飲食業経営者、伝統工芸士等多様であり、比較的西陣において独自の捉え方を有している可能性が高いと予想される者を選定した。実施時間は約1〜2時間、参加者人数は3名ないし4名、発話内容は全てボイスレコーダーによって記録した。

結果、【外在の仕方】として初期設定の模型を用いた手法では、限定した領域に対応しない内容や地理的情報を伴わない内容、言語化し難い内容を扱うことが出来なかった。そこで、3回目からはより表現自由度の高いスケッチによる外在化を試行し、上記の内容を扱える事が分かったため、有効であると判断し、地理情報の共有や話の促進の為に地図を囲み、意味内容の外在化はスケッチによって行う手法へと切り替えた。また【記述の仕方】として、『ダイアログ』において採録されたあらゆるデータを素材にして再編集する作業を記述化と呼び記述化されたものを記述と呼ぶ。この段階では共に価値付けた内容の記述化よりも先ず、2、3時間の『ダイアログ』の流れの状況を文字起こし等から記述化する手法のプロトタイプを開発した。さらに『ダイアログ』における参加者の役割として居住者等情報提供者はInformantと呼び、積極的な態度が無ければInformantの記憶や現在の生活圏等のヒアリングになってしまい、自地域の価値付けには至らないことが分かったことから、より

触発し共につくりあげるように働き掛けるApproacherという役割を明確化した。ここで構造化されたPhase1での手法は中間設定とした。さらに、『ダイアログ』の内容としては図3の『都市認識』の初期的論点を満たすような話から共に価値付けることが出来た^{注5)}。

3-3. Phase2【テスト『ダイアログ』の実施と考察】

本phaseではオペレーションに参加する協力者らの練習を兼ねて、協力者ら9名と筆者で3回のテスト『ダイアログ』のロールプレイを実施し、中間設定の未だ構造化されていない【話の仕方】を中心に構造化を試みた。結果、『ダイアログ』の内容に関しては参加者全員がある捉え方に関して納得し、価値と見なすような状態には至らない場合があった。そこでスケッチをInformantへ見せ合い、意味内容を確認め合う作業を取り入れる事により対話の促進が図られ、【話の仕方】と【外在の仕方】の両方に関わる了解の確認手法として有効であることが分かった。また事前にApproacherが図8のような地域に関する地理情報や歴史的



写真2. テスト『ダイアログ』の様子



図8. 空間的・時間的事象の重ね合わせ（凡例は図11参照）

等、例えば平安京建都や市電敷設等の主に都市空間の変化が起こったもの）を把握しておくことで、地域に関する『ダイアログ』の導入として少なくとも互いに話が成り立ち易いことが分かり、それを手法として取り入れた。以上から、『ダイアログ』は成立しない場合があること、また成立に向けてApproacherも積極的に努める必要がわかった。

3-4. 構造化された『ダイアログ』の設定

ここまでで構造化した【話の仕方】【外在の仕方】【記述の仕方】【設定の仕方】を統合した『ダイアログ』手法は以下になる。設えは図9のようになり、Approacherらは以下の1〜4のような態度と振る舞いによって価値付けを働き掛ける。

1. Informantの『都市認識』を積極的に捉えようとする姿勢で聞く。気になるところや面白いと感じたこと、Informantにとって重要でありそうなことには反応しつつ、相互的なやり取りによって進める。
2. 以下3段階のテーマを意識しながら問いの投げ掛けを行いながら『ダイアログ』を進める。
第1段階：Informantの都市との関わり（生業や記憶等）
第2段階：Informant自身が関わる地理的まとまり（自地域）

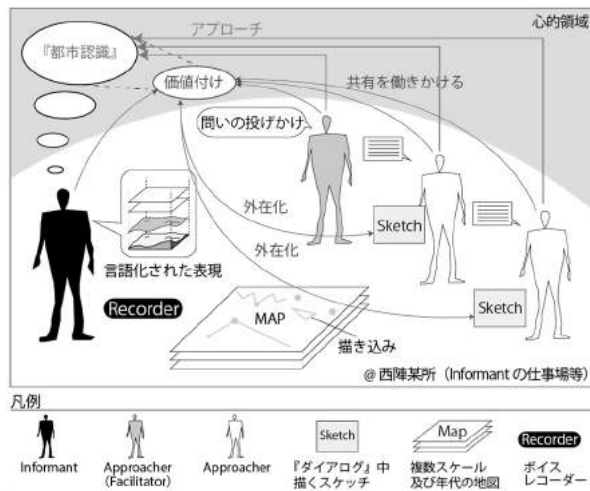


図9. 構造化された『ダイアログ』の設え

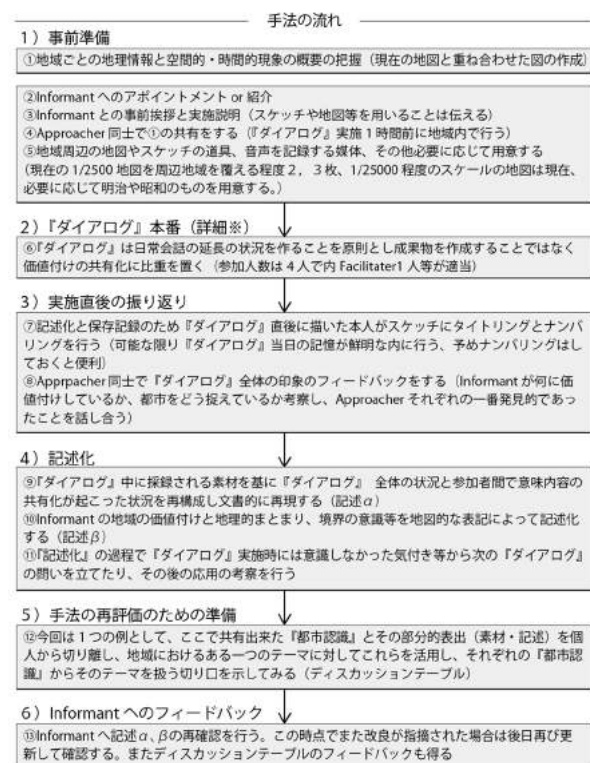


図10. 『ダイアログ』のオペレーションの流れ

第3段階：自地域への価値付け

3. 語りの内容から思い描いたものをスケッチする。特に描き方を指定しないが言語化された表現だけを描くのではなく、その背景に仮定出来る『都市認識』を描くことに努める。ここでは少なくともApproacher2人以上が同じ内容を描くこととし、見比べることが出来るようにする。
4. スケッチをInformantに見せて確認することで、意味内容

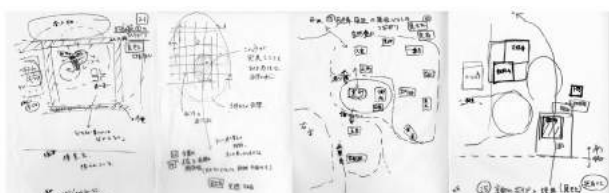


写真3. 『ダイアログ』中のスケッチの例

を理解し合う。改良がある場合は変化の痕跡を残すように赤いペンによって描き直す（写真3）。

また、『ダイアログ』実施の手順は概ね図10のようになる。この手順に従ってPhase3のオペレーションとフィードバックを実施した。

4. Phase3の実施概要

4-1. オペレーション『ダイアログ』の実施と記述化

本phaseではオペレーションとして7人のInformantと『ダイアログ』を実施した。Informantはスノーボールサンプリングによって選び、表1はその属性とApproacherとの対応を表す。表1から、例えば同じ西陣織の紋屋であるAとD、農家と西陣織職人でありながら近隣に住むAとE、北区のまちづくり等と共に取り組むEとF、といったような比較をすることが出来る7人である。各Informantと実施時間はおよそ2, 3時間であり、7回全てInformantとApproacherらがInformantの自地域に対して共に価値付け、『ダイアログ』が成立し、またそれぞれ40枚程度のスケッチを描き、見せたスケッチの中から半数程度は了解し合うことが出来た。了解を行う際にInformantから肯定的な発言が認められた場合に了解が得られたものと判断した。大よその内容は図11の【『ダイアログ』内容の概略】に記した。

『ダイアログ』実施後の記述化の手法はこの時点でさらに更新された。先ず図12のように『ダイアログ』状況の全体を把握することが出来る記述（記述αと呼ぶ）をそれぞれのInformantに対して行った。図12-①は時系列にパラグラフを並べ、図12-②③④はApproacherの問いの投げ掛けとInformantの応答を要約、地図に書き込んだやり取りなどが分かり、図12-⑤⑥⑦はスケッチを見せて了解を得たタイミングややり取りを把握することが出来る。図12-⑧⑨はInformantに見せたスケッチの一覧である。

また図11のように、スケッチや地図等の素材を編集してInformant毎の自地域への価値付け内容を地図的に記述化したもの（記述β）を作成した。記述βは価値付けの性質からスケールの伴った地図上では表現出来ないため、細部の厳密なスケールを問わない概略を示す図による表現とし、図8を参考としてInformantと共に価値付けた空間的・時間的事象を濃くし、『ダイアログ』中に言及されなかったものを薄く重ねた。また一纏まりに捉えている場所や境界等

表1. Informantの属性一覧とApproacherの対応図

Informant	A	B	C	D	E	F	G
世代 / 性別	70代男性	60代男性	70代男性	80代男性	70代男性	60代男性	70代男性
生業	紋屋職人	西陣帯屋の主人	綜絢屋	紋屋職人	旧家の当主	材木商	西陣町家の当主
実施地区	紫竹学区	乾隆学区	紫野学区	西陣学区	紫竹学区	紫野学区	桃菌学区
Approachers	a,b	c,d	e,f	g,h	i,j	k,l	m,n



写真4. のオペレーションの様子

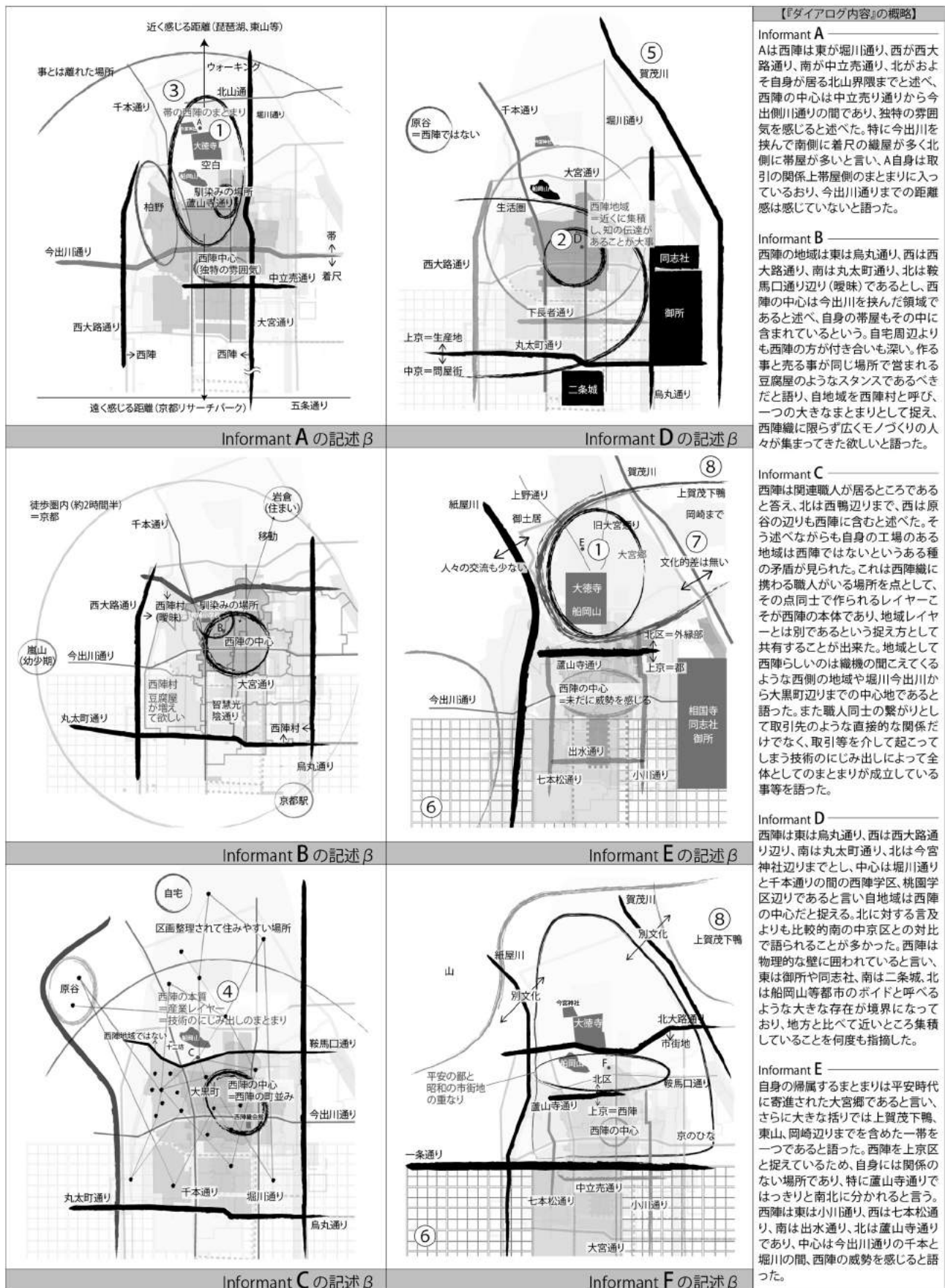


図 11. 記述 β 一覧 (次頁に続く)

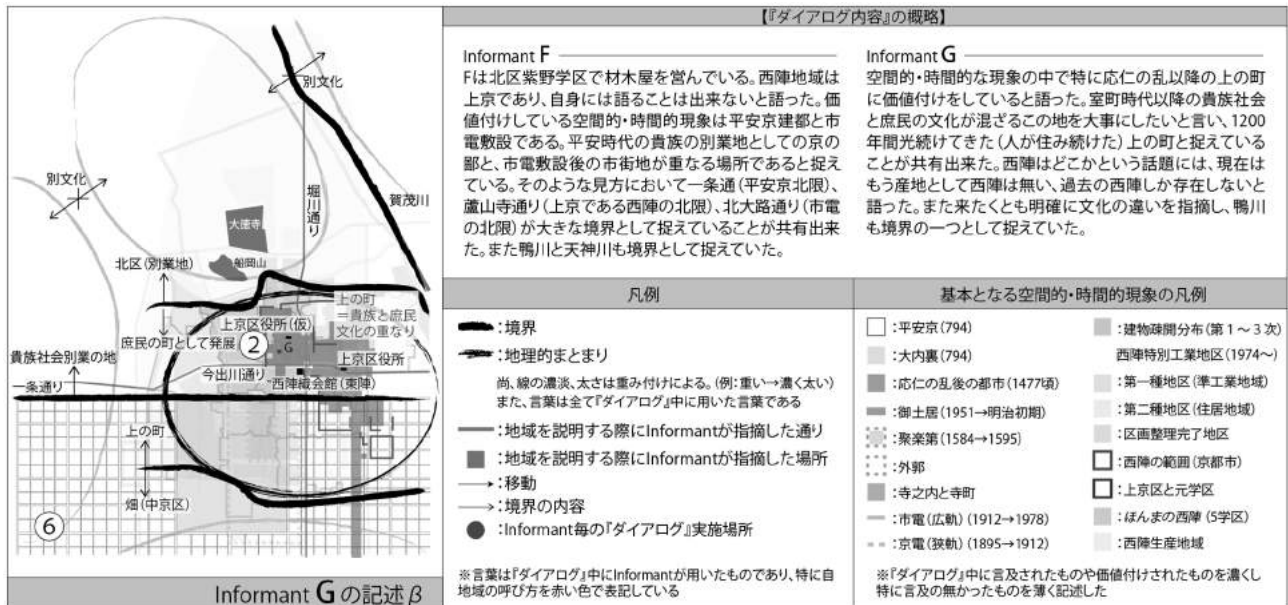


図 11. 記述β一覽 (前項の続き)

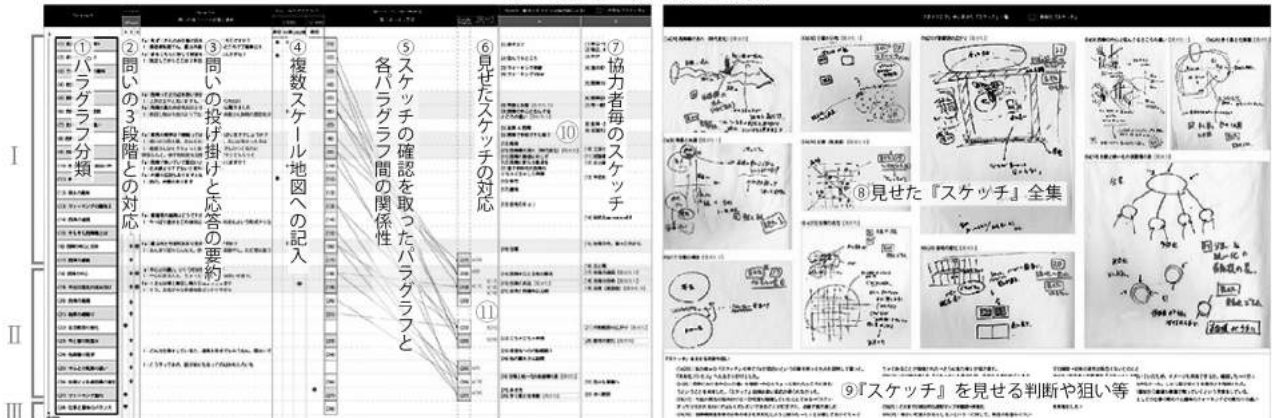


図 12. Informant Aの記述αのレイアウト例

は実線ではなく冗長性のある線によって記述し、共有された自地域への表現は赤色で表記した。

4-2. 手法の再評価の為の準備

ここでも一つの目的である将来に向けた議論への繋ぎにあたるものとして西陣に関わるテーマを想定し、オペレーションによって了解出来た『都市認識』とその外在化・記述化した表現をそのInformantから切り離して、これらを

(1) テーマ1「西陣地域において新たな転入者(都市との関わりを積極的に持とうとする者)はどのように入れたいのか」	
切り口1: 西陣は互いに顔の見える距離感であることが重要で、そういった関係性による知の伝達の文化がある。しかしそれは西陣縦関係業者間のネットワークで話であり、そこに居るべき人たちの話であるため、例えばサラリーマンには関係が無い。しかし今後その本質を応用した暮らし方もあるのではないかと考える。	
切り口2: 西陣はもはや西陣縦の町ではない。改めて応仁の乱以降の上の町として考える。1200年間光続けてきた(人が暮らしてきた)というプライドを持った暮らしをするのがいいのではないかと。	
切り口3: 西陣とはいえず上京区と北区では全く異なるため、どこに転入するかわり方も異なる。北区であれば今後50年、1000年を考えた時に1000年前に田んぼだったことを考え、方向性を考えなければいけない。特に上京というよりも下鴨や上賀茂、左京区との繋がりを考えるのがいいのではないかと。	
切り口4: 西陣縦とは別のレイヤーであることを意識して、地域社会に溶け込むことが重要である。西陣縦以外のモノづくりは西陣において産業レイヤーではない。西陣縦以外の価値を見出すようなことをするのがいいのではないかと。	
切り口5: 西陣では豆腐屋のように生産と販売を同じ場所で行うようなモノづくりをするのがいいのではないかと考える。西陣のどこでも構わないが中心をにぎやかにしてほしい。西陣村に入ってくるという感覚、モノづくりの町という特色を意識するのがいいのではないかと。	
切り口6: 仮に鞍馬口周辺に転入するのであれば上京区と北区の境、平安時代から京の都としてあった場所として考えて欲しい。西陣という意識はさほどなく、昭和以降の市街地とそれ以前の田舎が重なる境としての暮らし方をするのがいいのではないかと。	

図 13. ディスカッションテーブルの例 (テーマ1)

活用し、匿名的な切り口を提示することを試みた(図13)。これを本研究ではディスカッションテーブルと呼ぶこととし、地域将来像やまちづくり等に向けた議論の題材として位置付け、少なくともオペレーションに参加した居住者の『都市認識』をベースとしていることから居住者の関心から大きく外れない内容を提供することを期待するため、テーマはある程度抽象的であり、切り口は具体性を持つものを設定した。今回はテーマ1(図13)と他にテーマ2「西陣のコアはどうあるべきか」に対しても切り口を6つ作成した。

4-3. フィードバックの実施

オペレーションを行った Informant それぞれに記述α、β及びディスカッションテーブルに関するフィードバックを得るための場を設定し、3つに関する印象を自由に語って貰った。A、B、C及びE、Fは同時に行い、DとGはそれぞれ単独で行った^{注6)}。記述βに関しては7人とも大きな違和感も無く問題ないという回答を得ることが出来た。またApproacherにもそれぞれ参加した Informant の記述β及びディスカッションテーブルについて自由記述式のアンケートを行った。記述βに関しては全員基本的には自身の共有出来たイメージと大きな相違は無いと答えたが、細やかな

表現の仕方等について改善案の指摘が見られた。

5. 考察とオペレーションの評価

5-1. 記述αに表れる『ダイアログ』の展開

記述αは図12のように『ダイアログ』の全体状況を時系列に俯瞰することが出来る。ここで記述αを用いて『ダイアログ』は大きく分けて3つの段階に整理することが出来ることに注目した。先ず基本的に Informant の語りから始まり、図12-⑩のように Approacher らは問いを投げ掛けながら『都市認識』へとアプローチしつつ、内容のスケッチを描き続ける(図12-I)。次に図12-⑪のようにスケッチを公開し了解を得るように、自地域を共に価値付ける(図12-II)。そして最終的に参加者全員がある程度納得した Informant の自地域の価値付けを総括する段階へと続く(図12-III)。ここで注目すべきは、Informant によっては『ダイアログ』中に自地域の価値付けの表現を確立していくタイミングが異なることである。表2のように、比較的地域の語り部として他者へ解説をする経験を持つEやGは序盤から一貫した表現(大宮郷や上の町)を用いているが、その他の Informant は普段自地域について言語化することが少ないため『ダイアログ』の中で徐々に作り上げられていることが分かる。こうした『ダイアログ』の状況を文書的に再編集したものが記述αであり、内容的にそのプロセスを重ね合わせたものが記述βである。この点において、地図的な表現ではあるが調査によって得られる認知マップ⁴⁾とは異なると思われる。

表2. Informant の発話に見る自地域に対する表現の展開
(赤色は自地域への価値付けの最終的に共有された表現)

	Informant						
	A	B	C	D	E	F	G
I	「御召し物は今出川より下なんですよ」	「小学校からここに住んでた」	「(この辺りは)西陣らしい機音はしないけど」	「(西陣の中心は)千本から堀川の間に、まだ密集してる」	「明治時代まで朝廷としては最高の遊び場やね、この辺りは、(略)大宮郷ですわね。(略)3代遊った人間の間、交流がある地域でまとまる」	「ここは西陣とは言わない。(略)僕らやっば平安時代で語りたいなあ」	
II	「(今出川通り以北辺りと)あんまり変わらんねえ」	「自分が物作のおっさん居るとはこども全部西陣」	「地域としては西陣とは思わないけど」	「学区は学区のお付き合い、仕事は仕事」	「田舎とまちの中間のこの場所」	「ここは文化園としては、上の町。(略)貴族社会と庶民の生業の両方。」	
III	「主従が皆帯屋職物屋ばっかりから(同じまとまり)」	「僕らの感覚はまあ村なんやね、西陣村」	「点で存在するとしても全体としてまとまりがある?」「そうそうそう、そうです」	「ここに寄ってる感じは残ってほしい。(略)やっぱり顔をみないと」	「京のひなが(略)昭和以降に都西部に西陣の一角に無理やり入れられた感じ」		

5-2. 記述βに表れる Informant 毎の自地域の価値付け

図11から、同じ西陣職人同士、北区の者同士でも自地域への捉え方や価値付ける空間的・時間的事象、西陣の範囲、西陣の中心等は異なり多様性が認められる。例えば図11-①のようにAとEは同じ北区紫竹学区に住みながらEは自地域を「上京区とは別文化」*^{注7)}だと言い切り、Aは北区と上京区の境に位置する蘆山寺通りから今出川通り辺りと「あまり変わらんねえ、歩いていける距離」*であると述べ、約200m離れた今出川通りから自地域までを一纏まりとして捉えていた。同様に図11-②のようにDとGもが全く異なる。ここからは Informant 毎の個人的な

価値付けや捉え方を見ていく。Aは図11-③のように東西の通りでも今出川通りの南北の住み分けに強い意味を見出しており、今出川以北として西陣に自身の居場所をとして価値付けしているようであった。この住み分けは一般的に全く言われていない話ではないが、今回の7人の内A以外の西陣職関係者はそれほど強く意識したことではないことが分かっており、特にA独自の『都市認識』を通じた価値付けが出来ていることが分かる。Cに特徴的であったのは、図11-④のように産業レイヤーと地域レイヤーを分けて捉えている点であり、Kは「西陣地域というのはあまり意識しないね」*と言い自身の工場の辺りは西陣だと思うかという問いには「地域としては西陣と思わないけど(略)点としては中心」*という独自の西陣に対する『都市認識』を表した。Dは西陣職関係者の中でも図11-⑤のように自地域が加茂川から西であることを意識しており、全京都市的なスケールを有することが分かった。このような全京都市的なスケールは例えば図11-⑥のようにE、F、G等が平安京に対する自地域の関係に意識的であり、時空間的に大きな広がりを持った価値付けをすることが出来た。紙屋川や加茂川等の河川、堀川通りや西大路通り等の幹線道路を境界として捉えている者が多い中、図11-⑦のようにEは加茂川を境界として捉えず、自地域と上賀茂や下鴨辺りは「人々の交流がある。(略)ほぼ一緒」*であると捉えている。またEとFは図11-⑧のように「上賀茂下鴨」*と上賀茂と下鴨を一つ括りにして語ることが多かったがこうした括りもそれほど一般的ではない。

以上のように既に地域に広く了解を得ているような見方ではなく、個人の関心等に基づいた『都市認識』から自地域を共に価値付け、またその外在化をすることで情報として扱うことが出来た。

5-3. 『ダイアログ』参加者のフィードバックからの手法の評価

5-1, 5-2で記述に表れる価値付けとその共有化プロセスを確認した。本節では Informant と Approacher のフィードバックから手法の評価をする。

5-3-1. 『ダイアログ』の仕方

ここでは Approacher からのフィードバックを基に4章で実施した『ダイアログ』の仕方に関する評価を行う。jは「事前の準備のおかげですごく理解が深まった」**と述べたことから『ダイアログ』の事前打ち合わせにおける図10-①、④での地域の空間的・時間的現象の把握の効果が少なくとも参加者の理解の促進に役立つことが分かる。

スケッチによる手法は内容が完全ではないにしろ、『ダイアログ』の場において Informant の『都市認識』からずれていないことを確認しながら行うことが出来、これは当初の目的を満たすものであると言える。この過程に関してIは「話したことがすぐ絵になるのは面白い」*と述べる等 Informant 側の関心も高かったことからアクションメソッドとして居住者にも負担無く行うことが出来ると思われる。

Approacher のフィードバックにおいてスケッチを行い Informant へと確認をすることへの心理的障壁が指摘され

た。どういった内容が展開されるかApproacherには予測出来ないため、1は「描くまでもないことと頭の中で整理出来ていなくて、まとまらず描けないこと」**、があると言い手が止まってしまうことを指摘した。本手法ではスケッチの描き方を構造化してしまい手順的になることを避け、遠慮せずにスケッチを描き見せるような態度を支援するFacilitatorの振る舞いや道具の設定を重要視して構造化した。結果、全てのApproacherがスケッチを見せて了解し合うことが出来た。

5-3-2. 記述化

ここではInformantからのフィードバックを基に5-2で考察を行った記述に関する評価を行う。全てのInformantが記述βには大きな違和感はなく、「分かりますね(A)」**「結構です。丁寧にしてはる(D)」**「見た感想はびっくり(G)」**等のポジティブな評価を得ることが出来た。Informantらはディスカッションテーブル等では内容的に違和感や間違いがあると指摘を行ったことからこれらの発言にはある程度の信頼性がある。以上から『ダイアログ』手法によってInformantの『都市認識』から外れることなくそれぞれの自地域への価値付けをスケッチによって共に描き、定着することが出来たため、手法として評価出来ると思われる。

5-3-3. ディスカッションテーブルについて

Informantらから、「こういうのがあると話しやすいね(A)」**、「網羅されていると思うけどな。これ違うでということはないわ(G)」**等の意見が得られた上、実際に1時間程度これを題材とした対話が生まれたことから、その場の対話がある程度成立し活用の可能性を見ることが出来た。さらに匿名にしてあるため「この西陣織会館から大黒町までが中心って僕が言ったんやろか(B)」**と実際にはBは発言していない内容に関心を示したり、Eが「これ(図15の切り口2)はGさんっぽいなあ」**と述べたりしたことから、ディスカッションテーブルの目的の一つである居住者の関心から大きく外れない議論の題材を提供することが出来たと思われる。またInformant間の『都市認識』の重なりと見る事が出来るような例とも取れ、『都市認識』をベースとした日常的な対話状況の可能性が示唆された。

6. 結

6-1. 得られた知見

3章において手法の設定を行い、4章のオペレーションによって確認を行った。結果、Approacherによる積極的な態度とスケッチによる外在化の仕方を通して自地域を共に価値付け、その内容及び状況の記述化方法を取り入れた図10のような6段階からなる『ダイアログ』の手法を一つ開発した。そして5章において一般的ではない個人による自地域への価値付けを考察し、さらにInformantとApproacherからのフィードバックを得て記述の妥当性、議論の題材としてのディスカッションテーブルの設定の可能性を示し、手法の評価を行った。

6-2. 考察

図11に見るように西陣地域に対して、それぞれ西陣とはどこか、西陣らしさとは何かについて図1のレイヤーに対応するような個人差の大きな価値付けを複数可視的に表すことが出来、2章において取り上げたような①～④の困難さに関してもそれぞれ指摘事項を含んでおり、『ダイアログ』手法として有用であると思われる。

【補注】

- 注1) 本研究では都市・地域の景観的な側面だけでなく、場所や事物、社会組織等を分けずに、個人にとって現象する全てとするを一まとめにして扱うこととする。それら評価を考える際、個人によって何に価値を置くのかが自明ではないためである。
- 注2) 本研究は、E・フッサールに始まる一連の現象学の立場を採用している。都市・地域の価値付け、さらにはデザインを前提とする場合は、自身の経験外の情報や“客観的”と言われる根拠を求めるのは限られた条件下でしか実用的でないと考ええる。そこで、その場その時の状況において思い描く現象を重視するところから始め、『ダイアログ』という状況において思い描いたものを如何に扱い、情報とするか、が主題となる。
- 注3) 物理学者デイヴィッドボームが「意識それ自体の理解を目的とした」営みであると定義した『ダイアログ』は結論を急ぐような議論や表層的な会話ではなく、互いの想定を尊重した上で本当に思っていることを語り合う場である。これはヒアリングやアンケート等の調査とは異なるアプローチである。
- また『ダイアログ』は主にMITのピーター・M・センゲらによって経営論や組織論、リーダーシップ論等に展開され、将来提案型のグループワーク、シナリオプランニングと合わせて近年盛んである。これらは『ダイアログ』を前提とした将来の意思決定へ向けた取り組みであり、本研究のアプローチと類似するが、最終的な扱う対象が都市空間である以上、より価値付けを行う深いコミュニケーションや50年後100年後を見据えたシナリオの創造など時空間的なスケールを扱わねばならない点により複雑であると考えられる。
- 注4) 都市認識という言葉は既往研究では小説や漫画といった作品から多数の読者が都市をどのように捉えているかの一般的な都市像として扱ったもの1)、建築家の都市に対する認識を建築誌に掲載された言説から扱ったもの2)等が見られるが定義としては「都市に対する認識」で留まっている。また、都市に対する人々の認知を扱った先駆的な研究はK・リンチの「都市のイメージ」4)であるがリンチが対象を物理的環境に絞って限定しているため本研究とは狙いが異なる。
- 注5) 例えば、西陣にアトリエを構える金箔アーティストは、京都という都市空間を自身の作品のプレゼンテーション空間として捉え、プレゼンテーションに効果的な西陣の自地域に対して価値付けていた。
- 注6) この段階では、『ダイアログ』の結果としての記述が了解事項から外れていないかどうかの確認、次段階の議論の可能性を見るための意見や助言を得ることが目的である。前者に関しては、個別に実施する場合と複数人で実施する場合どちらでも結果に差はないと考えられ、後者に関しては個別と複数人の条件が異なる場合を実験的に設定し多様なフィードバックを期待した。
- 注7) 本稿におけるInformant、Approacherの発言や記述の引用は以下の区別をしている。「」内の(アルファベット)は発言者を表す。
*『ダイアログ』中の発言からの引用
**フィードバックからの引用

【参考文献】

- 1) 藤井亮介・八木幸二・是永美樹・松本淳：現代日本漫画にみる都市認識の構造、2004.7、池埜純一郎・奥山信一：現代小説にみられる都市認識と題材、1999.7 等
- 2) 宮本尚宜・山田深：現代日本建築家の都市における創作態度、2008.7、谷川大輔・塩崎太伸・奥山信一：戦後「新建築」誌での商業建築の設計論における外形表現からみた都市認識、2006.2 等
- 3) D・ボーム：ダイアログ - 対立から共生へ、議論から対話へ -、2007.10
- 4) K・リンチ：都市のイメージ(新装版)、2007.5